



## VMware VSANを採用しコストを大幅に削減しながら 運用負荷の軽減と高品質なストレージを柔軟に提供できる エンタープライズ向けクラウドサービスを実現

### 課題

- ・既存クラウド基盤の柔軟性・迅速性の向上
- ・高価な専用ストレージ装置
- ・ストレージ性能の干渉とゆらぎが顕在化

### ソリューション

VMwareのSDDCアーキテクチャを活用して、運用自動化を進めた次世代クラウド基盤を構築。VMware Virtual SANを活用したことで、高い拡張性・運用性を確保すると同時に、専用ストレージ装置の導入が不要となった。結果的にクラウドサービスの提供価格は既存クラウドサービスの半額ほどになり、コスト削減効果を達成。ユーザー毎に営業・SE担当を付け、より細かな導入やフォローアップができるサービスを提供可能に。

### 導入効果

- ・SDDC化によって柔軟かつ迅速なサービスを提供
- ・サーバーの内蔵ディスクを活用してコストを大幅に削減
- ・ソフトウェア制御によってストレージ性能を最適化

### 導入環境

- ・VMware Virtual SAN
- ・VMware vSphere
- ・VMware NSX
- ・VMware vRealize Operations
- ・VMware vRealize Log Insight

アイネットは、長年のBPO事業・データセンター事業で培った運用力・技術力を武器に、2009年からエンタープライズ向けのクラウドサービスを展開しています。しかし、当初のインフラは物理的な柔軟性に欠けており、特にストレージサービスのパフォーマンスや干渉問題が課題となっていました。そうした状況で、VMwareが提唱するSDDCアーキテクチャに共感。新しいクラウド基盤では「VMware Virtual SAN」を活用してサービスを高度化し、さらにストレージ費用の抑制、運用の効率化で既存サービスの半額で提供できるほどのコスト削減に成功しました。

### VMwareテクノロジーで 次世代のクラウド基盤を目指す

アイネットは、1971年の創業から石油業界を中心にBPOサービスを展開、ソフトウェア開発やシステムインテグレーションでIT技術を磨き、現在はデータセンター事業やクラウド事業にも注力しています。現代のSaaSやパブリッククラウドに連なるサービス事業を古くから提供してきた同社は、エンタープライズ向けの運用ノウハウを蓄積しており、その信頼性を高く評価するユーザーも多く、他社に先駆けて基幹業務向けのクラウドサービスも提供してきました。

同社のクラウドサービスは「Dream Cloud」と総称され、IaaS/PaaSの「EASY Cloud」のほか、30を超えるサービスが用意されています。社内に500名を超えるアプリケーション開発エンジニアを揃えて、先進的なサービスの提供に向けて邁進しています。

エンタープライズに求められる高い信頼性を保ちつつ、企業競争力を強化するクラウドサービスを提供しようと試みるアイネットでは、クラウド基盤の構築から4年を経て、いくつかの課題が表面化していました。

クラウドインフラを事業の拡大に合わせて拡張を続けた結果、冗長性、信頼性の確保が困難になりつつありました。特に専用デバイスを用いたストレージサービスでは、テナント間の干渉が無視できないほどになっており、パフォーマンスのゆらぎも見られ、サービスプランの違いが曖昧になりつつありました。

ミッションクリティカル向けサービスへの期待が膨らむ中で、高いサービスレベルを保ちながら、クラウドに求められる迅速性・俊敏性を提供するためには、インフラの刷新と強化が必要

だと考えられました。

クラウドサービス事業部 プロダクトマーケティング部 部長の高橋信久氏は、「私たちは、最先端の技術とサービスを提供することが優位性の1つだと捉えています。そのため、できるだけ早く新たな技術を取り入れて、時代に先んじる必要があると考えていました」と振り返ります。

### 先進的なVSANを採用して 競争力を強化

大きな課題を抱える中で、データセンター内のすべてのITインフラをソフトウェアでコントロールする「SDDC」アーキテクチャに出会いました。サーバー、ネットワーク、ストレージのすべてを仮想化することで、柔軟なサービス/リソースの提供と運用負荷の軽減、モビリティ性の向上が期待できます。また、サーバーの内蔵ディスクをリソースとして活用する「VMware Virtual SAN (VSAN)」を導入することで、パフォーマンスを維持しつつ、高い拡張性を持ったストレージ環境が安価に実現できます。

「VMware VSANの導入は、SDDCアーキテクチャ全体の中でも時期尚早に感じられました。しかし、将来にわたって先進性・優位性を保ちたいのであれば、今から採用すべきだと考えたのです。私たちは、初期のEASY Cloudから



株式会社アイネット  
クラウドサービス事業部  
プロダクトマーケティング部  
部長  
高橋 信久 氏